

リスク社会と防災(2)

— 生徒の行動を促すカリキュラムの開発 —

Risk Society & Disaster Prevention 2

— Development of the curriculum to motivate the students to act positively —

公民科 加納隆徳
地学科 齋藤洋輔

<要旨>

公民科と理科(地学)のコラボレーション授業「リスク社会と防災」を実施することで、一つの教科だけでは得られない多面的な視点による教育効果が見られた。本論ではキーコンピテンシー獲得の観点から、コラボレーション授業をさらに発展させ、本校で毎年行われていた東北スタディツアーと連動させ、行動の場を提供した。行動の場とは、主体的に調査したり、問題解決のための手段を模索したりする場面のことで、本論においては、“合意形成”や“防災・防潮堤問題”の現場での活動を指す。ツアーを実施し、その前後で関心の度合いを比較すると、合意形成や行政の役割についての関心は大きく、防災や自然災害についての関心も若干増加し、「合意形成」と「防災」という筆者たちの抱える問題意識について、ツアーが一定の効果を果たしたことが明らかになった。ただし、活動についての評価の方法や、カリキュラムの位置づけなどの課題があり、本ツアーを継続的に実施しながら、今後、課題に取り組む必要がある。

<キーワード> 合意形成, リスク社会, 防災教育, 東北スタディツアー (In-cafe), キーコンピテンシー, トランスサイエンス

1. はじめに

本校は、平成24年度より文部科学省指定スーパーサイエンスハイスクール(以下SSHと表記)に採択され、主にキーコンピテンシーを中心に据えた教育カリキュラムの開発に取り組んでいる。キーコンピテンシーとはOECDが提唱した概念で、ライチェン・サルガニク(2006)ではキーコンピテンシーを以下の3つのカテゴリーで表している。

キーコンピテンシーの3つのカテゴリー

1. 相互作用的な道具の活用 (a. 言語, シンボル, テキストを相互作用的に活用する力, b. 知識や情報を相互作用的に活用する力, c. 技術を相互作用的に活用する力)
2. 社会的に異質な集団での交流 (a. 他者とうまく関わる力, b. 協力する力, c. 対立を処理し、解決する力)
3. 自律的な活動 (a. 「大きな展望」の中で活躍する力, b. 人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力, c. 自らの権利, 利益, 限界, ニーズを守り、主張する力)

そこで本校でも改めてキーコンピテンシーを以下のよう
に捉え、これらの素養を身につけた、知的総合力を持っ
たリーダーや科学的理解に基づいて行動できる市民の育
成を目指している。

本校の定義するキーコンピテンシー

- あらゆる問題を科学的に捉え、自ら積極的に解決できる知識、価値観、表現力、伝達能力、行動力および評価力。
- 科学的知見に基づく政治・経済活動の評価・判断力を備えている。科学・技術の理解と科学的・合理的判断に基づく行動ができる。

ここで注目すべきはキーコンピテンシーでは、言語やテキスト、科学技術を使いこなすリテラシー(カテゴリー1;以下、ライチェン・サルガニク(2006)のカテゴリーを引用)だけではなく、集団の中で意見を交わしながら(カテゴリー2)、具体的に行動に移すことができる(カテゴリー3)ことを求めている点である。つまり、社会の中で実際に活躍できる人材を育成する意味合いが色濃く現れているのである。

そこで本論は、加納・齋藤(2014)でも報告した公民

科と地学科のコラボレーション授業「リスク社会と防災」を実施し、それを踏まえ、本校 SSH 事業の一つである Intelligent Café（以下 In-café と表記。In-café とは事業全体の名称であり、活動を行う場所の名称であり、事業を行う人を指すこともある）で毎年企画していた東北スタディツアーと連動させて、行動に繋がる学びを提案するものである。

2. 問題提起 ～東北スタディツアーの必要性～

2-1 公民の視点 ～合意形成とキーコンピテンシー～

2-1-1 トランスサイエンス学習の必要性

昨今の社会問題は、公民科の学習内容のみで課題解決できることが少ない。今回取り上げている防潮堤の問題においても学問分野で言うと、理学・工学・経済学・政治学・哲学・心理学など多くの学問的知見を利用して議論する必要がある。例えば、「防潮堤があれば人は避難行動にうつす時間が遅くなる」という主張があるときに、心理学の面からのアプローチも必要であるし、そもそも防潮堤がないためにリスクの高い場所を放置することが許されるのかという政治哲学的な問題もでてくるであろう。すなわち、議論する一つ一つの言葉にさまざまな学問的知見を要求される。そのため、授業の間でおこなった各自の調べ学習は、さまざまな方法を用いて調べる必要があった。しかし、これは昨今議論されているトランスサイエンスの視点から考えれば、重要な学習であると考えられる。

防潮堤に関わる合意形成型授業は、昨今議論されているトランスサイエンスの視点からも、公民科と理科で授業を行う事に意義があると考えられる。すなわち、井田(2005)でも指摘するように高等学校の授業は、どうしても教科・科目のセクト主義に陥りやすい。セクト主義で授業を行えば、どうしても一科目からの視点でしか問題を見つめることが出来ず、社会問題に対する多面的なものの見方や考え方を養うことはできない。トランスサイエンスについては加納・齋藤(2014)でも述べているが、教科を超えた学習は、社会問題課題解決をするためには、今後一層求められる学習スタイルになると思われる。教科間連携をすることにより、多面的な見方が出来、その上で社会参加を目指す市民的態度育成を目指して、参加を中心において単元構成を行った。

2-1-2 市民性育成のための参加型学習

合意形成の必要性については、加納・齋藤(2014)で詳しく述べたが、合意形成の出来ない状態は、社会生活

を維持することがとても難しい。そのため、生徒たちは加納・齋藤(2014)の実践を通して、話し合いの大切さと、合意形成の難しさを体験することはできた。しかし、合意形成の重要性は理解できても、課題について解決するための行動に移すプログラムの実践までは至らなかった。

社会科教育学の研究者には、学校教育において市民性を育成することを目標にしている者がいる。彼らは市民が社会参加することを重要視している。例えば、唐木(2010)では、アメリカの公民教育の一つの目標として、「社会参加に基づく公民教育の目標は、最終的に「市民としての社会参加」に至る3つの段階として表現することができる」と述べ、具体的に、「観察者としての社会参加」・「批判者としての社会参加」・「形成者としての社会参加」の段階があり、最終的な目標として「市民としての社会参加」を目指しているとしている。これは、本授業でも念頭においたことであり、これまでの授業が知的理解に偏りがちであった部分を、参加を組み入れた学習をすることにより、市民性を育成することができると考えた。

これは、現在、本校のSULE委員会(SULE委員会とは本校でSSHを運営する委員会のこと)で実践研究をしているキーコンピテンシーとも関わるものである。キーコンピテンシーは、生徒に身につけてほしい能力を明らかにしたものであるといえるが、その一つに社会参加の概念(主にカテゴリー2とカテゴリー3)があるだろう。例えば、学校教育法21条1項にも「学校内外における社会的活動を促進し、…(中略)…主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。」とあり、今後の教育において、参加や参画は重要なキーコンピテンシーになると考えられている。

以前のスタディツアーは授業との連続性もなく、企画からしても「社会参加」を意識したものでなかった。そこで今回の東北スタディツアーでは、「社会参加」をキー概念にして、東北の被災各地を見学することにより社会問題に対する関心をもち、社会問題に対して行動・発信できる生徒を育成したいと考えた。このことにより、生徒たちの社会問題や行動に関わる意識の変容を促し、キーコンピテンシーでいう能力育成を目指した。

2-2 地学の視点 ～防災教育とキーコンピテンシー～

2-2-1 防災教育と行動

1995年(平成7年)に発生した阪神・淡路大震災や2011年(平成23年)に発生した東日本大震災、そして

最近では2014年（平成26年）8月豪雨による広島市の土砂災害など、大きな震災や自然災害を体験する度に、我々の社会は自然災害について多くのことを学び、我々の意識の改革が成される。その度に防災教育の必要性も唱われ、寺田寅彦が残したとされる“天災は忘れたころにやってくる”という警句を思い出すのである。

また、防災教育の最大の目標は、自然災害を十分に理解し、その上で実際に天災が起こった際には自分や家族の生命を守る行動をとれるようになることである。東日本大震災以降、そのような視点に立ち、防災意識の向上に主眼を置いた授業開発や研究が行われる例も目立つようになった。李ら（2011）では小学校の児童や教員、保護者を対象にリスクコミュニケーション手法を用いた防災教育を提案している。また、東北大学災害科学国際研究所（2014）では東日本大震災を振り返り、地域市民との日常的な避難訓練や児童生徒への減災教育の重要性を説いている。つまり、具体的な行動に繋がってこそその防災教育なのである。

さらにこれについて、ライチェン・サルガニク（2006）のキーコンピテンシーの観点から考えれば、災害に関する知識を活用し（カテゴリー1）、生命を守るという自律的な活動が求められる（カテゴリー3）。また東日本大震災のように震災が長期化し、避難生活が続くような場面では、他者とうまく関わり、時々起こる問題に協力して処理して解決していくことが求められる（カテゴリー2）。そのような意味では、防災教育からは若干離れるが、東日本大震災で東北の方々がどのように災害を乗り越えて、まちづくりをされているかを学ぶことは、知識の活用の仕方、柔軟なコミュニケーションの取り方、自律的な行動の取り方を学ぶことになり、キーコンピテンシーの観点から考えても東北を訪れる意義は多いと言える。

なお、防災教育の必要性やその背景については、加納・齋藤（2014）に詳しい。

2-2-2 「潜在的カリキュラム」としての防災教育

アメリカの教育学者である Jackson P.W. は、授業実践においては知識内容だけでなく、知識様式（教師と生徒の相互交渉を通して形成される様態）までを把握しなければならないと指摘し、この意識しないままに伝わる知識様式を「隠れたカリキュラム（hidden curriculum）」と呼んだ。現在では、教育課程研究などの分野を中心に拡大解釈されて用いられることも多い。教師の意図的に計画した正規のカリキュラムである「顕在

的カリキュラム（manifest curriculum）」に対して、教師の言動や振る舞い、友人なども含めた周囲の環境から意図しないままに伝わる価値観や知識を「隠れたカリキュラム・潜在的カリキュラム（latent curriculum）」と呼んでいる（田中ら、2011）。

前述のように、防災教育の目標が防災意識を向上させることや、災害時に避難行動をとれるようにすることと捉えるのであれば、授業「リスク社会と防災」から「東北スタディツアー」までのプログラム全体を通じて、防災を防災として直接教えるのではなく、潜在的に教育効果を発揮できるものとする。まず、授業「リスク社会と防災」においては、合意形成や政府の役割を中心に学びながらも、防潮堤の話題を取り上げたり、防災に詳しいコンサルタントの方の取材の話をしたりすることで（加納・齋藤（2014）参照）、案に防災の必要性について考える機会となるだろう。また「東北スタディツアー」においても合意形成や防潮堤建設の現場を見ながらも、東北に身を置き、甚大な震災を経験し、乗り越えられた方々と時間を過ごすことで、防災意識の向上に繋げることが出来ればと考えている。

さらに視点を変えれば、2-2-1でも述べたように、「東北スタディツアー」にて東北の方々の日常の様子から潜在的にキーコンピテンシーを獲得することになると考える。また気仙沼・南三陸・東松島と複数の地点でまちの様子を比べると、合意の形成の議論の流れは様々であり、それと同様に、専門家（科学者）の議論への参加の仕方も様々である。このような議論を見ることで、“市民の意思決定と科学者の立ち位置の関係”や“科学的なデータの使い方”など“科学のあり方”のようなものを考える機会にもなってほしい。震災で被災され、多くの苦難を乗り越えられた東北の方々と時間を共にし、どっぷりと東北に浸かることで、防災意識のみならず、潜在的に学ぶことは多いと考える。

2-3 授業改善の視点

2-3-1 加納・齋藤（2014）の課題

昨年度も実施した授業「リスク社会と防災」の課題に、ロールプレイにおける議論の充実があった。具体的には議論に切実さを持たせることである。このような課題が起こる要因の一つには、東北から離れた東京で議論していることが挙げられるだろう。つまり、生徒も教員も東北の現状に対して、切実さや深刻さが欠如しているのである。したがって実際に東北を訪れ、震災の爪痕や復興の現状を見たり、現地の人から話を伺ったりすることは、

今後の授業にて東北の現状と乖離することなく、ディスカッションを進めさせるためには必要なことと言える。

なお、東北の現状に対して切実さが欠如していることを指摘したが、切実さがあまりすぎないがために、授業のロールプレイのテーマとして取り上げることが出来ることも付け加えたい。

2-3-2 In-café 東北スタディツアーの課題

In-café は、2012年（平成24年）度のSSH指定と共に動き出した事業で、生徒の柔軟な発想を育成することと、知的な議論が自由に行える空間を創出することを目的に創られたものである。その企画の一つに、東北で被災された方をゲストに招いて、東北の復興について話し合う「カフェ討論会3.11+560日の若者たち」というものがあつた。この中でゲストの方から、東北を訪ねて現状を見たほうがよいとアドバイスを受け、始まったのが「東北スタディツアー」なのである。このような経緯もあり、第1回目の東北スタディツアーは、討論会を企画した熱心なIn-caféスタッフの生徒たちを中心に充実したものとなった。しかし、スタッフの移り変わりと共に、スタッフの生徒たちの関心の中心と東北スタディツアーに間に乖離が起こり、スタッフの生徒だけでは東北スタディツアーを企画し切れない事態となってしまった。そこで、筆者らが行っていた授業「リスク社会と防災」と連動させ、合意形成や防潮堤の議論の現状を調査するツアーとして今回の「(第3回)東北スタディツアー」を企画したのである。

なお、これまでのIn-caféの活動や東北スタディツアーの詳細については、宮城ら(2013)や内山ら(2014)に詳しい。

3. 東北スタディツアーの実践

3-1 事前指導

3-1-1 授業「リスク社会と防災」の実践

3-1-1-1 加納・齋藤(2014)からの変更点

昨年度実施したコラボレーション授業から大きく変更した点は以下の3点である。

①現代社会のカリキュラムへの組み込み

昨年度の授業は研究授業など、投げ込み式の授業で、限られたクラスのみの実施であったが、今年度は2年次の現代社会のカリキュラムの中に完全に組み込み、筆者が授業を担当している4クラスすべてに実施した。

②シチュエーションの変更

加納・齋藤(2014)での課題より、共助を意識させられるようなロールの設定を行った。具体的には、幼い子どもがいたり、年老いた家族がいたり、避難するためには周囲と協力せざるを得ないロールを増やした。

③住民説明会の流れの変更

昨年度の授業では全体に対する説明会、全体で質疑応答、地区説明会(班ごとの説明会)という順序でロールプレイのディスカッションを進めていったが、今年度は最初から班ごとに説明会を行い、班ごとに議論を進める形をとった。

3-1-1-2 学習指導計画

◇単元

現代社会「地方自治」(「リスク社会と防災」)

※「特講 科学の方法」として公民科と理科(地学)とのコラボレーション授業を実施。「特講 科学の方法」については、加納・齋藤(2014)に詳しい。

◇実施期間

2014年5月27日(火)～2014年6月27日(金)

※途中、教育実習期間として3週間を挟む。

◇実施クラス

2年A組45名(男子22名、女子23名)

2年B組44名(男子21名、女子23名)

2年C組44名(男子22名、女子22名)

2年F組44名(男子22名、女子22名)

◇各時間の主な内容

1時間目「政府の役割と防災計画」

- ・1970年代以降、政府の役割のあり方を問う声が大きくなってきた。小さな政府・大きな政府という考え方を通じて、国の果たすべき役割を問い直す動きが出てきた。それは財政赤字の問題からでてきたものである。
- ・防災計画を進める行政側のグループと防災計画を受け入れる市民側のグループの二つのグループに分ける。その上で、各グループに与えられたタスクを達成するためのグループワークを行う。
- ・次回の授業に向けて、課題などを確認する。

※教育実習期間：住民説明会への準備期間

2時間目「住民説明会」

- ・各立場の役割を再確認し、住民説明会に臨む。
- ・全体に対して行政側が説明を行う。事業内容の説明及び質疑応答を行う。
- ・行政側（1名）と市民側（6名）が同じテーブルを囲み、「静岡県H市の防災計画」について話し合いを行う。話し合った結果をまとめる。

3時間目「合意を形成すること・合意形成の難しさ」

- ・グループごとの合意内容を発表する。
- ・合意内容の振り返り、合意内容のマッピングをする。
 - ①なぜその合意内容が結ばれたのか？
 - ②どのような手続きで合意内容が決定されたか？
 - ③そのほかの合意内容と比較してみよう
- ・社会で生起する問題を解決するために「合意」は必要なのか。「よい政府」をめざすための条件とは？
- ・コンサルタント会社での取材ビデオをもちいて最後の考えを深めさせる。
- ・東北の被災地や防潮堤について議論をしている地域を見学する東北スタディツアーを行うことを紹介し、実際の社会問題として現れている東北に関心をもたせる。

※学習指導計画の詳細は本論の末の資料を参照。

3-1-2 In-caféでの授業「リスク社会と防災」の実践

現代社会において2年生4クラスに対しては「リスク社会と防災」を実施できたものの、2年生の残りの4クラスと1年生の8クラスは授業を行っていない状況であり、これらのクラスを対象にIn-caféで6/23（月）と7/1（火）の2日間に授業を実施した。しかし、広報活動の不徹底や定期テストの準備期間と重なったことなどの理由により参加者は大変少ない結果となり、授業で行ったようなロールプレイ形式のものは実施することが出来なかった。

3-1-3 参加者の確定と確定後の指導

全校の生徒に対し、9/11（木）～9/19（金）の応募期間を取り、東北スタディツアーへの参加者を募集した。In-caféでの実践がうまくいかなかったこともあり、授業をした4クラス以外にはツアーの趣旨が十分に伝わりきれない形での募集となってしまった（募集の用紙には

ツアーの概要は書いてあるものの、筆者たちの問題意識は授業ほど伝わらない）。

募集に対しては26名の参加希望があった。その内訳は授業を受けた2年生が9名、3年生が1名（昨年度実施）、授業を受けていない2年生が2名、1年生が14名となった。3年生の1名は筆者たちのアシスタントという立場で優先的に選び、残りの25名から19名の枠を抽選で決定した。

抽選の結果、20名の参加者を決定した。その内訳は授業を受けた2年生が8名、3年生が1名、授業を受けていない2年生が1名、1年生が10名となった。参加者に対しては9/29（月）に事前指導を行った。内容は、授業「リスク社会と防災」を受講していない生徒が約半分いたので主に公民の面から、最初に政府の役割を考えさえ、国債残高が急増している理由、そして防潮堤問題を政治経済の観点からどのように考えるのかを考えさせた。また地学の面からは、実際に訪問するそれぞれの地点が東日本大震災に際して、どれほどの津波が襲ったのかを、東北大学災害科学国際研究所が提供する「津波痕跡データベース」を用いて調査する課題を出した。その後、2回程度の事前ミーティングを経て、東北スタディツアーに向かった。

3-2 東北スタディツアーの実践

3-2-1 ツアー行程の概要

ツアー 1日目 10/11（土）

- 08：00 東京駅集合
- 08：48 東京駅発
- 11：23 一ノ関駅着
- 11：40 一ノ関駅発（昼食：車内にて弁当）
- 13：00 気仙沼・大谷海岸・小泉海岸…活動1
- 18：30 ホテル着
- 19：30 夕食
- 20：00 ミーティング
- 23：00 消灯・就寝

ツアー 2日目 10/12（日）

- 07：00 朝食
- 08：40 ホテル発
- 09：00 南三陸・志津川地区
（防災庁舎、旧志津川駅跡）散策
- 10：00 志津川中学校クラウド仮設住宅…活動2
- 12：00 昼食
- 14：00 東松島・ボランティア活動…活動3

- 16:00 東松島みらいとし機構講話
 19:00 ホテル着
 19:30 夕食
 20:00 ミーティング
 23:00 消灯・就寝

ツアー最終日 10/13 (月)

- 07:00 朝食
 08:00 ホテル発
 09:00 東北大学災害科学国際研究所 IRIDeS
 特別講義…活動 4
 11:30 東北大学発
 12:00 仙台駅着 (昼食: 仙台駅近辺で各自)
 13:33 仙台駅発
 15:36 東京駅着
 16:00 東京駅解散

3-2-2 見学・講義の概要とその意図

活動1 気仙沼での活動 10/11 (土) 午後

【案内人】

三浦友幸さん

気仙沼まちづくり支援センター

阿部正人さん

「小泉海岸及び津谷川の災害復旧事業を学び合う会」
 事務局長

【概要】

防潮堤建設の議論に揺れる大谷海岸で、三浦さんに大谷地区における防潮堤建設の議論の推移について震災後から現在まで順を追って説明して頂いた(図1)。大谷海岸には現在、土嚢が積まれ、仮の防潮堤がつくられており、高い黒い壁ができています。しかし、大谷海岸で建設しようとしている T.P.9.8m (T.P.: 東京湾の平均海水面) の防潮堤の目印はさらに高いところにあり、改めて防潮堤の高さを体感することができました。土嚢の上に乗って、現地の方々が眺めてきた美しい大谷海岸を見ながら、三浦さんと質疑応答を続けた。大谷地区はできる限り専門家を交えずに市民と行政が議論し合い、防潮堤の位置や高さ、工法など、現在も模索が続いている。大谷海岸は防潮堤建設の是非に結論が出ていない数少ない海岸の一つである。議論では、“世代間格差”や“むら社会”など、合意形成を阻む“意識のギャップ”が数多く存在することも伺った。



図1 気仙沼・大谷海岸での説明の様子

次に、実際に建設された野々下海岸の防潮堤を見学した。T.P.9.8mの防潮堤がすでに建設されているものの、海岸の途中で途切れている(図2)。これは林野庁の所管する土地にだけ優先的に建設した結果なのである。ここにも縦割り行政の非効率さが見え隠れしている。

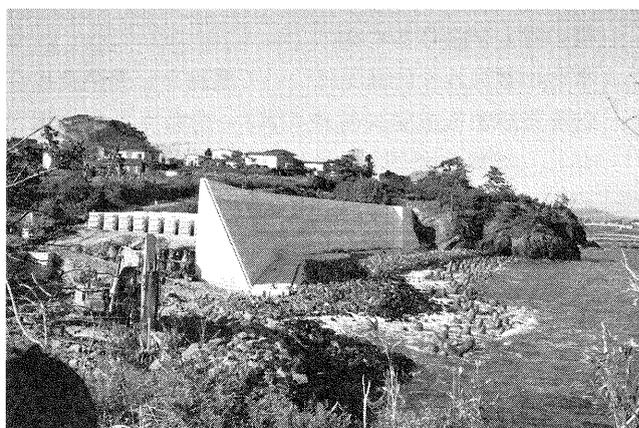


図2 気仙沼・野々下海岸の防潮堤

その後、大谷地区を離れ、小泉地区に移動した。高台にある小泉小学校から小泉地区を眺めながら、被害の状況と復興の推移を阿部さんから説明して頂いた。震災直後、小泉地区には一時的な震災がれきの処分場ができ、がれきの処分作業が終了して、現在は更地に戻されていた。兼業農家が多かった小泉地区では、津波でやられてしまった農地を復元することが難しく、農家をやめてしまった方も多かった。その結果、持て余した土地を防潮堤に利用してもらおうと、防潮堤建設を推進する意見の人が多数派であった(阿部さんは建設に疑問を感じ、反対の立場を取る)。小泉地区は全体として、高台移転を決め、整地も徐々に進んでおり、大谷地区とは全く異なった議論を進めていた。

そして、最後に小泉海岸に出向き、ここで計画されている T.P.14.7m の防潮堤の大きさを体験するために、参加者 20 名が手をつないで、距離を計った。防潮堤は台形型の断面で、横幅 90m にもなる巨大なもので、参加者が手を繋いでも、防潮堤の半分の距離にも満たなかった (図 3)。

【意図・趣旨】

- ・気仙沼市における津波被害や復興の状況を調査することができる。
- ・大谷と小泉の異なる地区での防潮堤建設の議論の状況を比較することができる。
- ・防潮堤建設に反対する市民の立場の意見を伺うことができる。
- ・実際に建設された防潮堤を見学することができ、どれほどの大きさのものなのか実感することができる。



図 3 気仙沼・小泉海岸での説明の様子

活動 2 南三陸での活動 10/12 (日) 午前

【案内人】

鈴木豊和さん

南三陸町志津川中学校仮設団地自治会役員

【概要】

まず、南三陸町志津川地区の防災庁舎や旧志津川駅跡を散策し、南三陸町の災害の様子を観察した。その後、高台にある志津川中学校グラウンドの仮設住宅を訪問し、集会場で鈴木さんに震災直後の様子やこれまでの復興の推移を伺った (図 4)。南三陸町は津波被害がひどく、低地にあったほとんどすべての建物は津波により流され、まち全体が跡形も無くなってしまった。震災直後から時間の経過とともに、苦労や恐怖の内容が変化していったそうである。震災直後は食料を探すことや低体温症の老人を死なせないこと、数日経てば救援物資の仕分

け、1 年経てば仮設住宅で孤独死をさせないこと。孤独死に関しては、それを防ぐためのコミュニティづくりの実例が数多く紹介された。芋煮会やコンサートなどのイベントづくりや、会話を生む工夫など様々であった。また、我々が被災したときにはリーダーシップをとれる人材になって欲しいとのメッセージも頂いた。

昼食は南三陸でコミュニティカフェ「commons」を営業されている内海さんに作って頂いた弁当を食べながら、引き続き、鈴木さんのお話を伺った。南三陸町では震災遺産として防災庁舎を残すかどうかで、現在も揺れている。防災庁舎を残したくないと解体することに決めた南三陸の住民に対して、ぜひ残して欲しいと国や県から要請が入り、2015 年 3 月までは解体しないことが決まっている。

【意図・趣旨】

- ・南三陸町における津波被害や復興の状況を調査することができる。
- ・防潮堤建設に反対する市民の立場の意見を伺うことができる。
- ・保存か解体かで揺れる“震災遺産”。マスコミで取り上げられ有名になった南三陸町対策防災庁舎を見学することができる。
- ・実際に仮設住宅に伺い、その現状を伺うことができる。コミュニティの雰囲気を見せて頂くことができる。



図 4 南三陸・志津中仮設住宅での説明の様子

活動 3 東松島での活動 10/12 (日) 午後

【ボランティア活動受入団体】

「美馬森 JAPAN」

【概要】

「美馬森 JAPAN」とは「馬」と「森」をキーワードに、癒しの場と体験学習の機会を提供し、岩手県・宮城県の

沿岸被災地の子供たちに“笑顔”と“喜び”を届けることを目的として活動されている一般社団法人である。「美馬森 JAPAN」は、東松島市が現在、開発・整備している高台の裏にある森林の管理・保全を委託されており、高台に誘致される病院と森林の癒しの効果を実験する予定になっている。

当日は、森林整備作業を実施した。森林の下草を刈り、整地して、「美馬森 JAPAN」の活動が行える空間をつくった(図5)。

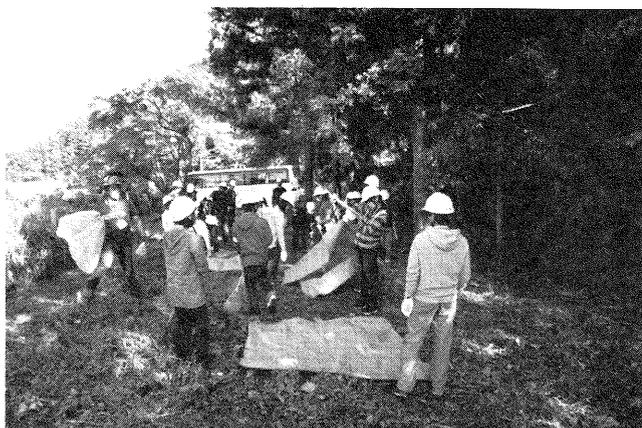


図5 東松島・ボランティア活動の様子

【講師】

渥美裕介さん

一般社団法人東松島みらいとし機構

【概要】

ボランティア活動終了後、東松島市役所に戻り、東松島の被災と復興、防潮堤建設の現状、そして東松島みらいとし機構の活動について、渥美さんより話を伺った(図6)。東松島は津波により浸水面積は大きかったものの、他の自治体に比べて復興は素早く進んだ。仙台や石巻といった大都市に挟まれる恵まれた立地条件だけでなく、震災以前から、地区ごとの自治体制が整っていたこともあり、現在も地区ごとの特徴を活かした復興がなされているようだ。防潮堤建設に関しては、防潮堤の高さも T.P.4.3m と比較的低いこともあり、建設に向けて動き始めているばかりか、安全確保のための二線堤の工事の話も出ているそうである。また現在、高台移転をする地区もあり、仙石線の移設など、その地域の再開発の紹介もして頂いた。その中の一つの事業である、森林の管理作業の一部を我々がボランティア活動として手伝ったわけである。復興が進まない気仙沼や南三陸とは対照的な復興の進み具合に、生徒たちも驚き、戸惑っていたようであった。

【意図・趣旨】

- ・東松島市における津波被害や復興の状況を調査することができる。
- ・復興が進んでいない気仙沼市や南三陸町に対して、復興が進んでいる東松島市の状況を比較することができる。
- ・具体的に体を動かすボランティア活動を通して、復興に直接参加でき、またその実感も得ることができる。
- ・復興計画を進める側である行政の立場の意見を伺うことができる。

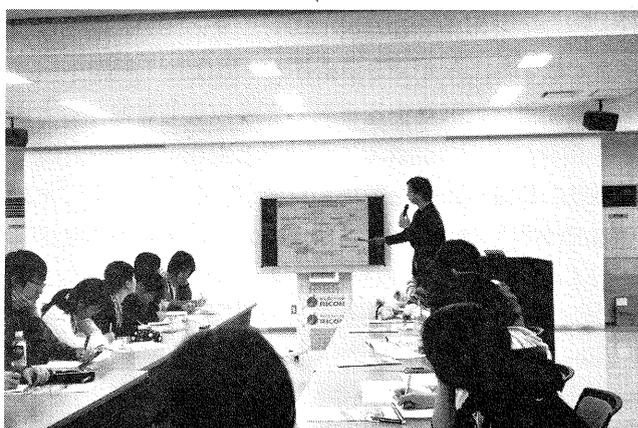


図6 東松島みらいとし機構での説明の様子

活動4 東北大学での活動 10/13(月) 午前

【講師】

平野勝也 東北大学 准教授

災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門災害復興実践学分野

【概要】

「防潮堤とまちづくりのコンフリクトやその実践的解決」という演題で、東日本大震災の津波被災地における復興まちづくりの現状を話して頂いた。まず、「まちづくりとは…」というテーマで、都市開発との比較を行った。経済面を重視し、事業主体が中心となる都市開発に対して、まちづくりは愛着や誇りを持てるように住民が主役となるものである。次に防潮堤建設については、防潮堤建設(津波対策)と他の災害対策の間で矛盾はないかという視点を頂いた。例えば、防潮堤を越えた津波が防潮堤に妨げられ、海に逃げていかず被害をさらに大きくすることも考えられる。また、津波対策が100年に1度の津波に備えていたとしても、洪水対策の河川工事が10年に1度程度の洪水を想定していたとすれば、津波対策の効果は意味のないものになってしまうのだ。さらに平野准教授は、根本的に復興が進まない根幹として、時間感覚のずれを挙げていた。500年に1度の稀な現象と

捉える一般の感覚と、その稀な現象を実際に体験した被災者の感覚の間で齟齬が起きていると話した。それらを踏まえ、まちづくりには、“防災”、“生業”、“持続可能性”、“歴史性”の4つの視点が必要だと主張された。

【意図・趣旨】

- ・復興のためのまちづくりの計画を立案したり、意見したりする側である研究者の立場の意見を伺うことができる。
- ・まちづくりのためにはどのような視点が必要なのか、実例を交えながら、専門の立場から伺うことができる。また、その話をもとに気仙沼市・南三陸町・東松島市の実例を整理することができる。

【講師】

菅原大助 東北大学 助教

防災科学国際研究所災害リスク研究部門低頻度リスク評価研究分野

【概要】

平野准教授に引き続き、「津波について」という演題で、菅原助教にお話を伺った。まず東日本大震災の津波について、被災直後の状況を捉えた画像やデータをから、被害のパターンや推測されるメカニズムについて解説して頂いた。また、東日本大震災の被害状況の調査の様子も紹介頂いた。次に、過去の巨大津波災害の履歴解明の試みとその現状について話して頂いた。具体的には、東日本大震災は“1000年に1度の津波”と形容されるが、“1000年”の根拠はどのように考えられているのか、貞観津波(869年)の津波堆積物の分布から明らかにしていった。

【意図・趣旨】

- ・震災の被害調査の実際を知ることができる。また、津波堆積物の調査に基づき、“1000年に1度”などの数値が明らかになる過程を伺うことができる。
- ・地震災害に対する興味・関心を高めることができる。

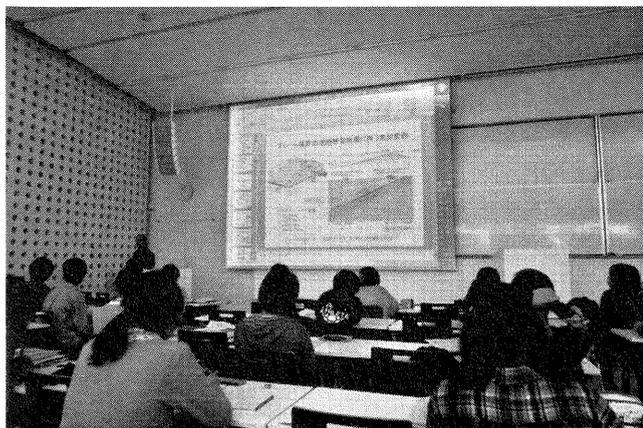


図7 東北大学災害科学国際研究所特別講義の様子

3-2-3 ツアー中の課題

ツアー中は、生徒各人にスケッチブックを配布し、それにツアーで調査した内容、聞いた講義の内容、学んだこと、気づいたこと、資料などをすべてまとめさせた。スケッチブックは事後指導の際のふりかえりのための資料とした。

3-3 事後指導

ツアー終了後、数回の自主的なミーティングを開き、このツアーにて報告や問題解決に向けた生徒らなりの提言を、3枚のポスター形式にまとめた。そして、それを平成26年度SSH東京都市指定校合同発表会(日時:平成26年12月23日(火)、会場:玉川学園高等部中学部)にてポスター発表を行う予定である。

3-4 東北スタディツアーの評価

本ツアーでは、ツアーの前後で参加者20名に対して、質問紙によりアンケートをとり、それぞれの活動への興味の度合いや防潮堤建設に関する意見などを記述してもらった。ツアー前後の記載内容の変容から、ツアーの教育効果について評価する。

3-4-1 授業「リスク社会と防災」の評価

まず、授業「リスク社会と防災」受講者9名を対象に、以下のA～Gの7つ項目について、授業を受けたことで関心の度合いがどのように変化したか、5(極めて肯定的)～3(普通)～1(極めて否定的)の5段階で評価してもらった。以下はそれぞれの関心の度合いの平均値を示したものである。

- A この授業を通して合意形成について関心が増した。(平均値:4.2)
- B この授業を通して行政の役割について関心が増した。(平均値:4.0)
- C この授業を通して防災について関心が増した。(平均値:4.0)
- D この授業を通して防潮堤について関心が増した。(平均値:4.0)
- E この授業を通して自然災害について関心が増した。(平均値:3.6)
- F この授業を受けて、合意形成の現場を見に行きたくなった。(平均値:4.4)
- G この授業を受けて、防潮堤を見に行きたくなった。(平均値:4.1)

どの項目も比較的高い値を示し、このことから本授業が合意形成や防災に関して一定の関心を持たせることに成功したと言える（ツアー参加者の関心が高いのは必然的ではある）。特に、合意形成に興味を持たせ、東北スタディツアーに参加し、合意形成の現場を調査したいというモチベーションを高めたと言える。

3-4-2 参加者のモチベーション

すべての参加者を対象に、本ツアーに参加した動機を以下の①～⑧から複数選んでもらった。以下がその結果であるが、授業「リスク社会と防災」受講者と未受講者の内訳も示した。

- ①合意形成に関するテーマに興味があったため
7名（受講者：5名 未受講者：2名）
- ②防災に関するテーマに興味があったため
8名（受講者：3名 未受講者：5名）
- ③防潮堤に関するテーマに興味があったため
9名（受講者：4名 未受講者：5名）
- ④高校での勉強以外の活動に参加してみたかったため
8名（受講者：4名 未受講者：4名）
- ⑤その道の専門家や地元の人話を聞いてみたかったため
6名（受講者：2名 未受講者：4名）
- ⑥進路の参考にするため
1名（受講者：1名 未受講者：0名）
- ⑦友達に誘われたから
3名（受講者：1名 未受講者：2名）
- ⑧その他
4名（受講者：2名 未受講者：2名）

①の項目に関して、授業「リスク社会と防災」の受講者と未受講者の割合を比較すると、授業が合意形成についての関心を高めたと言えるだろう。また未受講者も防災や防潮堤など、東北の現状に関心がある生徒が集まっ

たことが分かる。また、⑧の項目に関して、中学校時代に東北の復興を継続的に学習していたらしく、実際に東北を訪れたいと参加した生徒も見られた。

また、表1はすべての参加者を対象に、以下のA～Fの6つ項目について、ツアーを経験した前後で関心の度合いがどのように変化したかを示したものである。数値は5（極めて肯定的）～3（普通）～1（極めて否定的）の5段階で評価してもらったもので、関心の度合いの平均値である。

- A：合意形成について議論
- B：行政の役割について議論
- C：防災や防潮堤について議論
- D：自然災害について議論
- E：東北における復興
- F：ボランティア活動

表1中で、ツアー前の数値を見ると、特にC：防災や防潮堤についての議論や、E：東北における復興に関心が高いことが分かる。対して、A：合意形成についての議論やB：行政の役割についての議論には、相対的に関心が高くないことが分かる。

3-4-3 合意形成についての意識の変容

図8はツアーを経験した前後で関心がどのような度合いで変化したかを示したものである。質問の内容は表1と同じである。表1や図8のAやBの項目を見ると、合意形成に関して興味が増している生徒が多いことが分かる（A：増加8名、B：増加9名）。20名の生徒の平均値も大変高い値まで増加している（表1）。

表1 ツアー前後での関心の度合い

（調査項目） A：合意形成について議論、B：行政の役割について議論、C：防災や防潮堤について議論、D：自然災害について議論、E：東北における復興、F：ボランティア活動
（関心の度合い） ツアー前後で高い値の方を黒塗り。

	A		B		C		D		E		F	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
平均	4.15	4.50	3.90	4.60	4.50	4.55	4.20	4.40	4.70	4.65	3.90	3.60
受講者平均	4.33	4.67	4.11	4.67	4.33	4.22	3.78	4.22	4.67	4.56	3.78	3.33
未受講者平均	4.00	4.36	3.73	4.55	4.64	4.82	4.55	4.55	4.73	4.73	4.00	3.82

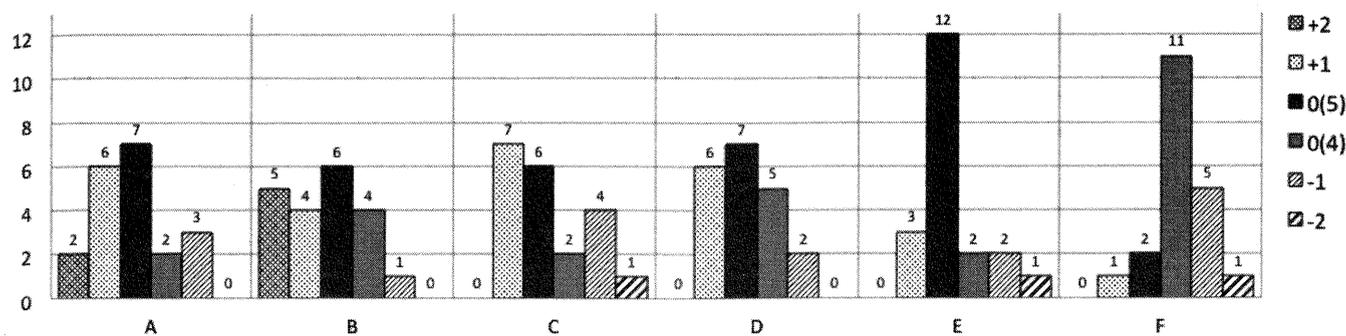


図8 ツアー前後での関心の度合いの増減

(調査項目) 表1に同じ

(関心の度合いの増減) プラス評価：ツアー後の方が高評価(数値はポイントの増加分), 0(5)・0(4):変動なし(5→5・4→4), マイナス評価：ツアー前の方が高評価(数値はポイントの減少分)

また、合意形成が実現するためには、どのようなもの・条件・態度が必要になるかという問いに対して、ツアーの前後で自由に記述してもらった。まず、ツアーを体験したことで、合意形成に必要な要素がより具体的に見えてきたようである。ツアー前には、相手の意見を傾聴する姿勢や、双方が妥協するという意見が多く見られた。対してツアー後になると、異なる立場への理解、互いの共通点を探す、信頼関係を築く、相手思いやる態度をとる、地域のコミュニケーションづくり、時間とお金、などツアーで体験した事例の中から、様々な視点からの具体的な解決策を記述できるようになっていた。またその反面、さらに分からなくなったという意見も見られ、実際に合意を形成することの困難も至る所で見えてきたことも分かる。

生徒の記述より(ツアー前)

- ・自分の意見を通すだけでなく、人の意見もよく聞き、その内容について考えてみること。(1年女子)
- ・両者の意見を踏まえた上で、互いにメリット・デメリットがあるような妥協点を設けるべきだと思う。(1年女子)
- ・市民の負担が少ないこと。(2年男子)

生徒の記述より(ツアー後)

- ・自分の意見についてデメリットを考えてみること。(1年女子)
- ・お互いの考えを尊重し、自分たちとの共通点を探していくことが大切だと思う。(1年男子)
- ・震災が起こる前から、行政と市民が協力するような体制をあらかじめつくっておくことが必要である。(2年女子)

- ・相手を傷つけないように、相手のことを考えて意見を言う態度。(1年男子)
- ・相手を敵視しない態度。(1年女子)
- ・あまりきれいな話ではありませんが、お金と時間が必要と感じました。(1年女子)
- ・尚更分からなくなった。(2年女子)

3-4-4 防災についての意識の変容

表1や図8のCやDの項目を見ると、防災や自然災害に関して興味が増している生徒がいたことが分かる(C:増加7名, D:増加6名)。20名の生徒の平均値も大変高い値まで増加している(表1)。したがってこのツアーが防災や自然災害に対する意識の向上に、一定の役割を果たしたことを示している。つまり、2-2-2で問題提起したように、このツアーが潜在的カリキュラムの意味を持ったものと言える。

3-4-5 東北の復興についての意識の変容

表1や図8のEの項目を見ると、東北の復興に関しては興味が増した生徒は少ないものの(E:増加3名)、ツアー後も高い関心を持つ生徒が多いことが分かる。20名の生徒の平均値も大変高い値まで増加している(表1)。したがってこのツアーが防災や自然災害に対する意識の向上に、一定の役割を果たしたことを示している。つまり、2-2-2で問題提起したように、このツアーが潜在的カリキュラムの意味をもったものと言える。

4. 今後の展開

本研究の内容をまとめると、以下のような課題や今後の展望が挙げられる。

①評価の不十分

本プログラムにおいて、評価の対象となるものは、生徒が作成したスケッチブックや事前・事後アンケートだけであった。また、半分程度の生徒は1年生であり、現代社会の授業を受けていない状態であった。そのため、授業と東北スタディーツアーとの繋がりについては、まだ不十分な検証にとどまっている。今後、評価方法を含めて検討の課題としたい。

②カリキュラムへの還元の見点

合意形成に関する授業は、本授業以外にも国語科や英語科、公民科でも生物とのコラボレーション授業「生命倫理」などで行っている。これらの授業では、似たような観点で授業を行っているものも多岐にわたらず、話し合いの段階について校内での議論が深まっていない。別の言い方をすれば、本校のカリキュラムにおいてどのような段階を設定することができるのかを早急に検討する必要があると思われる。現在、SULE委員会ではキーコンピテンシー部会を中心に、本校生が獲得すべきキーコンピテンシーを研究している最中であるが、合意形成などを中心にして授業内のカリキュラムを再編成にしていくことも検討する必要があるであろう。

③継続的に活動することでの変容

本年は初めて、コラボレーション授業と東北スタディーツアーを連動させて実施した訳だが、評価の面やカリキュラム上の位置づけの面など多くの課題を残した。そこでこれらの課題を解決すべく、来年度以降も本プログラムを継続的に実施したい。

また継続的な実施により、本年度参加した生徒を来年度も連れて行き、指導役的な立場として参加させることも計画している。このように2度参加する生徒たちが、どのように初参加の生徒たちを巻き込んで、学習内容を深めたり意識を変容させるきっかけを作り出していきたいと考えている。

謝辞

本ツアーの実施にあたり、気仙沼市の三浦友幸さん・阿部正人さん、南三陸町の鈴木豊和さん、東松島市の渥美裕介さん、東北大学 平野勝也准教授・菅原大助助教には、東北の被災状況や復興の推移など、大変有益な話をして頂いた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 井田仁康 (2005) 社会科教育と地域 - 基礎・基本の理論と実践 -, NSK 出版, pp.144-149
- 内山正登・川角博・齋藤洋輔・坂井英夫・塚越健一朗・宮城政昭・池尻良平 (2014) Intelligent Cafe における新しい学びの取り組み : コーディネーション能力の獲得と学芸カフェテリアとの連携, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 51, pp. 111-133
- 加納隆徳・齋藤洋輔 (2014) リスク社会と防災～ 政府は市民の命を守るために合意形成できるのか～, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 51, pp. 33-50
- 唐木清志 (2014) サービス・ラーニングの今日的意義, アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング, 東信堂, p.105
- 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵 (2011) 新しい時代の教育課程 第3版, 有斐閣, pp. 249-251
- 東北大学災害科学国際研究所 (2014) HFA IRIDeS Review Report “2011年東日本大震災から見えてきたこと”, pp.32-36
- 宮城政昭・齋藤洋輔・池尻良平・原田和雄 (2013) Intelligent Cafe の運営とコーディネート能力の育成 : SSH の取り組みと新しい学びの形の創出, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 50, pp.97-118
- ライチェン D.S.・サルガニク L.H. (2006) キーコンピテンシー ～国際標準の学力をめざして～, 赤石書店, pp.88-121
- 李泰榮・長坂俊成・須永洋平 (2011) リスクコミュニケーション手法を活用した子どもの防災教育と効果 - 茨城県つくば市における事例 - (演旨), 日本地球惑星科学連合大会予稿集, 2011

資料 学習指導案

教科・科目 公民科 現代社会 「地方自治」(リスク社会と防災)
 ※「特講 科学の方法」として、公民科と理科(地学)のコラボレーション授業を実施
 実施日 2014年5月27日(火)～2014年6月27日(金)(途中、教育実習期間を3週間挟む)
 実施クラス 東京学芸大学附属高等学校 2年各クラス

1. 単元計画

◇ 単元 「リスク社会と防災」

◇ 単元の目標

「市場の失敗(政府の役割)」の学習を通じて、公共財の提供に関わる政府の役割を学ぶ。地学基礎の学習を振りかえり、防災について関心を持ち、防災対策における政府の役割について考えを深める。他者(行政側・市民側)との話し合いを通じて防災における政府の役割について追究することができる。その上で、他者との合意形成を目指しながら、社会的ジレンマを抱えながらも他者とともに社会をつくることの大切さを感じることができる。

◇ 単元ごとの評価規準

関心・意欲	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
○「防災と政府の役割」に興味・関心を持ち、積極的に課題を追究し、自分たちの意見をまとめようとする事ができる。 ○今回の事例から、東日本大震災の被災地で起きている問題にも注目し、防潮堤問題が地域に与える影響について関心をもつことができる。	○津波に関わる「防災」についてどのような仕組みがあるのかを学び、津波対策について判断し、行政の役割と絡めながら意思決定をすることができる。 ○他者の意見を尊重しながら自分の意見とすりあわせを行い、合意することができる。	○「防災」についての資料を読み解き、他者にわかりやすく伝えることができる。 ○話し合い活動を通じて、他者に自分の意見を伝え、双方が納得できる合意を目指そうとすることができる。	○「防災と政府の役割」の具体的な内容について理解することができる。 ○「防災と政府の役割」についてテーマを理解し、グループ学習を通じて、より深く内容を理解することができる。

2. 学習指導案

1 時間目 (5月実施)

◇ 本時の目標

1. 政府の果たすべき役割について復習し、関心をもつことができる。
2. 東日本大震災後、政府の想定している東海・東南海・南海地震の規模や被害はどれほどか、リスクの現状について理解することができる。

指導の内容・ねらい	学習活動	指導上の留意点など
○政府の役割 復習 (10分)	○「大きな政府・小さな政府」についての学習を復習する。	※1学期で学ぶ経済分野と関連づける。

○授業のねらいと説明 (10分)	○政府の役割を考える上で、本單元では「防災」をテーマにしてロールプレイ型の授業を行うことを説明する。	※役割表を回覧し、自分の班・役割を確認させておく。
○東海・東南海・南海地震のリスクの現状 (10分) ○ロールごとの設定の説明・打ち合わせ (15分)	○資料を用いて、現在の太平洋側の地域が抱える東海・東南海・南海地震のリスクについて説明を行う。特に東日本大震災を受けて津波の被害想定が深刻になったこと、H市(浜松市)の津波想定などを中心に説明する。 (行政役) ○別室に移動。 ○防災計画・防潮堤の概要、津波のL1・L2レベルの考え方、予算などの根拠、今後の課題と予定について説明する。 ※課題：住民説明会のためのパワーポイント、資料づくり (市民役) ○ロールごとに設定を配布し、ロールを確認させる。 ○ロールごとに自らの条件を理解し、その中で最も“譲れない条件”を確認させ、次回の話し合いに向けて準備を行う。	※(齋藤)簡単に資料の見方を話し、被害想定現状を理解させる。 ※(齋藤)行政側を担当、(加納)市民側を担当し指導する。 ※(齋藤)行政役の生徒と共に次時までに資料を作成する。 ※(加納)ロールを全うすることを強調する。
○まとめ (5分)	○次時の流れを簡単に紹介する。	※次回に向けての作業について指示をする。

2時間目 (6月実施)

◇ 本時の目標 (2時間目と3時間目連続授業)

1. リスク社会と防災というテーマを通して、政府の果たすべき役割について関心をもつ。
2. 防災対策についての話し合いを通して、社会を維持していくために合意形成が必要であることを理解する。
3. リスク社会と防災について、政府のあるべき役割を小さな政府・大きな政府という考え方から考察し、生徒間で意見を発表することができる。
4. リスク社会と防災について、実際にどのような問題が生じているのかを追究する意欲をもつ。

指導の内容・ねらい	学習活動	指導上の留意点など
○授業のねらいと説明 (10分)	○前時までの振り返りを行った上で、本日の授業を説明する。 ⇒本時のねらい(授業の流れ・住民説明会の概要)と議論の対象となるH市の設定説明を行う(H市の位置・場所、地域環境など)。	※教育実習期間があったため、この授業は3週間ぶりにおこなったものである。
○防災計画の全体説明会 (10分)	○防潮堤の建設計画について行政側から説明を行う。 ※行政側のタスク：行政側の公務員として防潮堤の政策提案を行い、市民との合意形成を目指す。	
○市民ごとの打ち合わせ (5分)	○市民のシチュエーション(座席：市民のロールごとに着席)を確認させ、ロールごとに行政の提案した防災計画について起こりそうな質問を議論させる	※(齋藤)行政側を担当、(加納)市民側を担当し指導する。

	<p>【市民の役割設定】</p> <p>市民 A：年齢 38 歳，海から近いところに家族で同居。</p> <p>市民 B：年齢 33 歳，一人暮らし。結婚の予定なし。</p> <p>市民 C：年齢 53 歳，サラリーマン / 主婦，海から 3k m の高台のマイホームに居住。</p> <p>市民 D：年齢 75 歳，老夫婦，現在，年金生活中。</p> <p>市民 E：年齢 16 歳，高校生，以前，陸前高田市に住んでおり，中学生時に東日本大震災を経験。</p>	<p>※事前に準備していた行政に対して市民はロールごとに議論する場が少なかったため，設定確認も含めて議論する。</p>
○質疑応答（5分）	○市民側からの質問に対して，行政側が資料などを使いながら説明する。	<p>※設定上，説明が困難な場合に関しては，齋藤を中心に説明を行う。</p>
○地区説明会（15分）	○行政 1 名 & 市民 5 名が一つのグループとなり，地区説明会を行う。行政側と意見交換を行う。行政側はここで合意形成を目指す。	
○まとめ（5分）	<p>○地区（班）ごとに結論をまとめて，時間内に合意形成したものをホワイトボードにまとめる。</p> <p>※ホワイトボードには合意内容とその理由を書く。</p>	<p>※（加納・齋藤）あらかじめどのような合意結果となったのか確認しておく。</p>

3 時間目（6月実施）

指導の内容・ねらい	学習活動	指導上の留意点など
○前時の議論の結果発表（15分）	○前時の合意形成の内容を行政役の生徒が発表する。発表された内容に対して教員がコメントを行う。	※齋藤は主に防災計画に関して，加納は主に財政的な見地からコメントを簡単に行う。
○合意形成をマッピングする。（5分）	<p>○黒板に各自の班でまとめた合意形成のホワイトボードを以下の図の中にマッピングする。</p> <p>【板書内容】</p> <div style="text-align: center;"> </div>	※（加納）各班の合意内容から簡単にマッピングする。

<p>○なぜ、その合意形成に至ったのか？ (5分)</p> <p>○どのように合意形成をしたのか？ (5分)</p>	<p>○なぜ、その合意形成に至ったのかを各班の代表者から聞きとる (各班の主張した「幸福」の具体的な内容を聞き出す)。</p> <p>○どのように、その合意形成に至ったのかを各班の代表者から聞きとる (各班の決定プロセスを可視化して、「公正」な話し合いが行われたかを考える)。</p> <p>→「公正」な話し合いとは、どのような手続きをすれば公正な話し合いと言えるのだろうか？この問題に関して多数決だけで決めて良いのだろうか？</p>	
<p>○授業者からのメッセージ (15分)</p>	<p>○授業者からのメッセージ (問題提起) として、コンサルタント会社取材したビデオを紹介する。</p> <p>⇒ 政策議論への市民参加の新しい形</p> <p>⇒ 政策議論への市民参加のあり方とは？</p> <p>現在、東北において震災復興を目的に防潮堤の問題が議論されていることを指摘し、どのような解決策があるか考えさせる。</p> <p>秋に希望者を募集して東北の被災地及び実際に防潮堤について議論をしている地域を見学する東北スタディツアーを行うことを紹介し、実際の社会問題として現れている東北に関心をもたせる。</p>	<p>※実際に行政と市民との間を取りもつコンサルタント会社の社員の取材ビデオを見せる。</p>
<p>○まとめ (5分)</p>	<p>○今回の授業をうけた感想をまとめさせ、社会的な問題にかかわる合意形成のありかたをクラス内で共有させる。</p>	<p>※配付プリントに生徒の感想を記入させる</p>